

新刊紹介

近年刊行されたイスラームに関する図書を紹介するコーナーです。今回は、二〇〇九年に刊行された図書を中心に、和書八冊、外国語図書七冊を取り上げました。四〇〇字から八〇〇字程度で、早稲田大学イスラーム地域研究機構に所属する研究者が、それぞれの専門分野に関して、評者と図書の選択を行いました。入門書から専門書まで、分野も多岐にわたります。なお、最後に、単なる新刊紹介ではなく、分量も二〇〇〇字を超える、書評を掲載しております。

和書



佐藤次高
『イスラーム―知の営み』
(イスラームを知る一)

山川出版社、二〇〇九・九

湯川 武

早稲田大学イスラーム地域

研究機構教授



横田貴之
『原理主義の潮流―ムスリム同胞団』
(イスラームを知る一〇)

山川出版社、二〇〇九・九

高岡 豊

上智大学アジア文化研究所

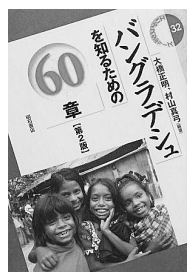
研究補助員



本書はNIHUプログラム「イスラーム地域研究」の研究成果を広く一般読者にも伝えていこうという目的を持って企画されたシリーズの第一冊目の本である。共同研究としての「イスラーム地域研究」は、(一)いくつかの地域をとりあげ、それらを比較する地域間比較の手法と、(二)現代の問題ではあっても、歴史をさかのぼって解明する歴史的アプローチの手法をとりつつ研究を深めるという立場を採っている。本書はこの第二の手法をとりながら、いわゆる「宗教」としてのイスラームと、そのイスラームを信じるムスリムたちの社会の主として知的な営みを、平明な文章でもって分かりやすく語っている。分かりやすいということとは必ずしも内容のレベルが低いということではない。さらに深く学びたい人のためには示唆的な内容が詰まっているところもある概説的な好入門書である。

イスラーム原理主義を扱う書籍の主題が同胞団だということは、原理主義からテロを連想しアル・カイダやタリバーンに興味を抱く読者にはいささか地味に感じられることだろう。しかし、地味である(「ニユース性が低い」)ことは実際の社会の中での存在感や重要性が低いということではない。本書が同胞団を主題とすることには、「過激な活動に走る一部」ではない、大多数のムスリムの間でのイスラーム復興運動を正しく知ろうという問題提起が込められている。

同胞団誕生の背景やエジプト政府との関係、ハサン・バンナー、サイイド・クトゥブの思想が本書の主な内容である。それに加え、政治活動への進出を巡る葛藤と障害、同胞団を母体とするパレスチナのハマースの現状についても、平易かつきめ細かに解説しておりエジプトやパレスチナの時事問題についての需要にも応える良書である。また、計三点挿入されているコラムは、同胞団への著者の研究姿勢がにじみ出る秀逸なコラムである。



大橋正明／村山真弓 編著
『バングラデシュを知るための六〇章』
明石書店、二〇〇九・一

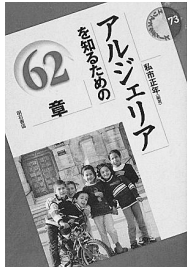


日下部 達哉

早稲田大学イスラーム地域

研究機構講師

本書はバングラデシュの専門家四五名によって記されたバングラデシュの入門書である。ここで紹介するのは、二〇〇三年に出版された第一版の売れ行きが好調であったため、二〇〇九年に改訂を経て出版された第二版である。とはいえ、単にデータ更新が行われただけではない。編者の大橋氏、村山氏が冒頭で述べる通り、この六年間にバングラデシュの経済・社会は、中間層の増加、縫製業の発展、中国との関係深化など、大きな変貌をみせている。それらに伴い、職業の多様化、学校教育の複層化、公正な選挙の実施など、様々な分野に影響が及んでいる。本書はそれら近年のバングラデシュに台頭してきた諸要素を、充分に取り入れて改訂されたものである。通読すると、現在のバングラデシュが未だに抱える貧困問題と、開発の成果の部分との両方が浮き彫りになってくる。バングラデシュに興味のある方はまず、本書を手にとって読んでみることをお勧めする。



私市正年 編著

『アルジェリアを知るための六二章』

明石書店、二〇〇九・四

佐藤 健太郎

早稲田大学イスラーム地域

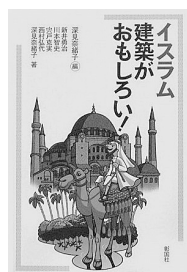
研究機構准教授

明石書店の『〜を知るための〜章』シリーズは、政治・経済・社会・文化・歴史など様々な角度から世界各国・各地域について解説する入門書シリーズである。そのうちの一つとして、アルジェリアをとりあげた本書が出版された。「Ⅰ自然環境と静態」「Ⅱ謎に包まれた古代史」「Ⅲイスラーム文明の時代」「Ⅳフランス植民地統治の時代」「Ⅴ独立と国家建設の歩み」「Ⅵ現代の政治と経済」「Ⅶ国際関係のなかのアルジェリア」「Ⅷ日本とアルジェリア」「Ⅷ日常生活にみえるアルジェリア文化」の九部構成となっており、それぞれ平均して約七〜八章くらいを割り当てて、アルジェリアの様々な側面が理解できるように構成されている。

本書の特徴は、編者が述べているように「アルジェリアで働いたり生活したりした人たちの体験を盛り込んだこと」である。「Ⅷ日本とアルジェリア」には、アルジェリアに駐在してビジネスの第一線で活躍してきた日本企業四社（伊藤忠商事、三井物産、三菱商事、日揮）の社員たちが、アルジェリアでの仕事ぶりを語った四つの章が含まれている。他にも、八〇年代半ばにアルジェ日本入学校で学んだ元児童や、九〇年代後半のテロが最も激しかった時期

に赴任した駐アルジェ日本大使夫人なども執筆陣に加わっている。彼ら元在留邦人たちの証言は、研究者の視点とはまた違った角度からアルジェリアを捉えており、非常に貴重なものである。

評者にとって、アルジェリアは近くて遠い国であった。評者が隣国モロッコに留学していた九〇年代後半、混乱を極めるアルジェリアとの国境は封鎖され、訪れたくても訪れられない状況が続いていた。しかし、それから一〇年以上が経過して情勢は変わり、本書の編者である私市正年氏や編集協力者（編者がいうには「実質的な共編者」）の渡邊祥子氏のように、長期間、アルジェリアに滞在して調査を実施する研究者も現れてきた。そろそろ訪れることができるかなと期待をふくらませながら読んだ一冊であった。



深見奈緒子 編著

『イスラム建築がおもしろい!』

彰国社、二〇一〇・一

岡村 知明

滋賀県立大学人間文化科学研究科

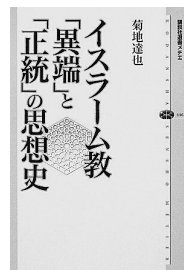
生活文化専攻生活デザイン論

研究部門博士後期課程

本書は、世界各地に建てられたイスラーム建築を、いつ、誰が、どこから、どのように、どんな建築を、なんのために、といった根本的な一〇〇の問いに執筆者らが分かりやすく解説する、入門書である。全一〇章と巻末にイスラーム建築の地域分布、様式年表、建築作品リストを加えた構成である。内容は、カーバ神殿に始まるイスラームの原理、理念から、モスクなどの象徴的な宗教建築、さらには都市、生活空間の世俗建築まで幅広く扱い、イスラーム建築の多様性とその魅力をこの一冊で概観できる。

第一章では、イスラーム建築の成り立ちと歴史的展開、地域的特性、第二章～第五章では、モスクのヴァリエーションに加え、墓建築、学校、病院、城砦といった機能、空間演出の見所となる庭園、精緻な装飾とその形状の複雑さによる空間づくりの手法を述べる。第六章、七章では、実際に建築をつくるための規範や材料、建設に携る建築家、工人、支援者の役割を述べ、第八章、九章では、都市の商業施設および住民の生活空間、生活様式に焦点を当て、一〇章では為政者の住む宮殿建築を扱う。一般に私たち日本人がイスラーム建築と聞いて想像するいわゆる「アラビアンナイト」の世界は、一九世紀に西欧の学者らによって西洋建築と対峙するものとして一括りにされ、そこで構築された「オリエンタリズム」の思想が前提となったもので、現実のイスラーム建築とは一線を画する。本書はその多彩さを描き出そうとする執筆者の

らの姿勢が色濃く、現実のイスラーム建築が現代の私たちにとって馴染み深いものであることを感じさせる。また本書では従来まであまり具体的に述べられることがなかった、設計理念、工匠集団の存在、町の集合住宅、為政者の建築への趣向、現代の商業建築についても言及され、イスラーム建築を学んできた読者にも新しい知見を提供する。



『イスラーム教「異端」と「正統」の思想史』

菊地達也

加藤 瑞絵
成蹊高等学校非常勤講師

本書は「シーア派の視点から初期イスラーム思想史を読み直すことを目指し」（四頁）たものである。

第一章では、預言者ムハンマド没後、彼の後継者をめぐって宗教共同体がなぜ分裂し、分派活動の結果どのような宗教理解が生まれたのかが考察される。アリーのカリフ位即位とともに始まった第一次内乱期に、政治党派としてのシーア派（シーア・アリー、すなわち「アリーの党派」）が成

立する。預言者の個人的カリスマを継承する存在としてアリーの宗教的権威が強調されるようになり、宗教教義は持たないものの、彼に絶対服従するシーア派の原型が形成されるまでの過程が示される。

第二章では、「異端」、「正統」、「宗派」、「学派」といった概念について確認される。シーア派は「正統」スンナ派から離脱した「異端」ではない。少数派であるハワリジユ派やシーア派が彼らの宗教教義を確立した後に、残された多数派が自分たちの教義を確立していったのである。著者は特定の集団を「正統」、「異端」と呼ぶことはせず、他者を「異端」とし、自らを「正統」化する（これは、シーア派、シーア派内の諸派、スンナ派それぞれに言える）ことで生じる思想的変化に着目し、イスラーム思想史を描くことを目指すのである。

第三章から第九章では、カイサーン派、ザイド派、一二イマーム派、イスマリーイェル派、ドゥルーズ派など、シーア派諸派の成立やその思想的特徴について紹介される。各派がどのような歴史状況の中で成立し、いかなる宗教教義を確立していったのか、同時に、彼らへの多数派側の対応と思想形成についても言及する。本書は、シーア派に関する記述が中心であるものの、シーア派思想の概説にとどまらず、多数派であるスンナ派をも含めたイスラーム思想史を、広い視野から捉えた大変興味深い作品となっている。



前田弘毅

『イスラーム世界の奴隷軍人とその実像——一七世紀サファヴィー朝イランとコーカサス』

明石書店、二〇〇九・二

野田 仁

早稲田大学イスラーム地域

研究機構研究助手

本書は、一七世紀のイランにおける政治体制の変化と中央集権化の実相を明らかにしようとする試みであるが、その大きな特徴は、グラーム集団に焦点を当て、これまでの「奴隷軍人」像の中で議論するのではなく、彼らを出身地との強い結びつきを保った「異人エリート」として捉えている点にある。彼らの故郷とは、グルジアを中心とするコーカサス地方であった。コーカサス地方出身者の中でも、イスラームに改宗したエリート層は、イランのシャーに直接従属するグラームとして宮廷エリートに組織されていたのである。

本書中には、辺境、周縁性などの魅力的なキーワードがちりばめられているが、イラン史の枠組みでアッバース一世による政治体制の変革を指摘するにとどまらず、イランとコーカサスの関係（安定化と前者に

よる後者の包摂として語られる）、さらには「辺境」グルジアの自意識にまで踏み込んで考察を行っている点は見事である。この作業を可能にしているのは、著者自身の表現に従えば「両側」の史料であるペルシャ語およびグルジア語・アルメニア語史料の詳細な分析である。これによって著者はこの時代のイラン史が持つ重層性を切り出すことに成功していると言っても過言ではない。なお、我々がいまだ十分親しんでいるとは言えないこれらのコーカサス諸言語による文献についても附編の史料解題から多くの知識を得ることができる。そのような意味でも、本書は前近代のコーカサスに関心を抱く者にも新しい世界を拓く手がかりを与えるであろう。



サラ・ロイ

『ホロコーストからガザへ
——パレスチナの政治経済学』

青土社、二〇〇九・一一

鈴木 恵美

早稲田大学イスラーム地域

研究機構准教授

著者のサラ・ロイは、第二次大戦後に

ポーランドからアメリカに移住したユダヤ人の両親をもつアメリカ人研究者である。イスラエルによるガザ占領の問題を専門としているが、親イスラエルの立場からガザ占領を研究するのではなく、早い時期から和平プロセスがイスラエルによる占領を強化すると指摘した人物として評されている。本書は、ロイが二〇〇九年三月に日本で行った講演をもとに編訳されたものであり、訳者の筆者へのインタビュなども収録されている。本編は二部構成になっている。第一部ではユダヤ教とイスラエル国家との関係や自身の文化的背景を論じ、第二部以降では、時系列的に第一次インティファダ期、オスロ合意期、第二次インティファダ期、ガザ撤退期に分けて論考が加えられている。

本書の元となっているのは著者が自身の博士論文に加筆して出版した『ガザ回廊』で、本書の序章でもかなりの紙面を割いて内容を紹介している。本書と併せて読むことで筆者のガザ分析を概観することができ、ガザ封鎖が長期化する現在、占領を政治経済学的見地から見つめ、実証的に分析した本作は、今後のガザの行方を考えるうえで大いに示唆を与えてくれる。

外国図書



Muhammad Dāwūd, Hasna' Dāwūd
(ed.), *Tārīkh Tiwān*, Editorial
Almuzara, Córdoba, 2008.
〔ティトゥワン史〕

関 佳奈子

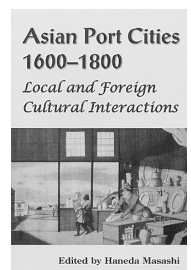
上智大学大学院グローバル・
スタディーズ研究科地域研究
専攻博士後期課程

本書は、ティトゥワンの歴史家、ムハンマド・ダーウッド（一九〇一〜八四年）の主要な著作を再編した、いわば要約書である。ダーウッドは、フェズのカラウイーイン大学で学んだ後、国内の教育機関でアラビア語とアラブ文学について教授した。一方、モロッコ北部沿岸の都市ティトゥワンの通史を、さまざまな史料を踏まえて全一二巻に著し、二〇〇九年までにそのうちの一一巻が刊行された。一九二〇年代に自身が開設したダーウッド図書館には、現在、約一二、〇〇〇冊の図書と、四、〇〇〇点以上の文書史料や写本、一五、〇〇〇点近くの写真などが収集、所蔵されており、ダーウッドの長年にわたる研究の軌跡を跡づけることができる。

本書の主対象は、現在のティトゥワン市の原形がつけられた一五紀末から、モロッコ北部地域がスペインの植民地となった二〇世紀前半である。要約書とはいえ、年代記や人名録といった多様な類型の史料に依拠した、五〇〇頁にのぼる大著だ。スペイン植民地時代に関する記述は、著者の娘で、彼の研究を引き継いだダーウッド図書館の現館長、ハスナー・ダーウッドによる加筆だという。

とりわけ興味深いのは、一八五九〜六〇年のアフリカ戦争に関する記述である。本書は、モロッコとスペインの戦況について、多数の文書史料や写本を駆使しながら徹底的に描写している。ユダヤ教徒を含めた当時のティトゥワンの住民の混乱した様子や、スペイン軍によってティトゥワンが占拠された状況が克明に記され、著者の同戦争への関心の高さを読み取ることができよう。この戦いを契機に、スペインはモロッコへの進出を加速させ、二〇世紀に入り、植民地政府の首都をティトゥワンに置いた。一九五六年の独立達成まで、モロッコ北部ではスペイン軍との断続的な衝突が続いたが、このような激動の時代を生きた著者の視点や心情を推し量らずにはいられない。同様に、この都市のファキーフやカーデイー、ムフティーなどの人名録、住民の姓表記一覧にも注目したい。

多様な史料類型や史料論だけでなく、モロッコ史、ひいては北アフリカ史全体におけるティトゥワンの歴史的位位置を確認するためにも、必読の一冊といえる。



Haneda Masashi(ed.), *Asian Port Cities 1600-1800: Local and Foreign Cultural Interactions*, NUS Press, Singapore in association with Kyoto University Press, Japan, 2009.

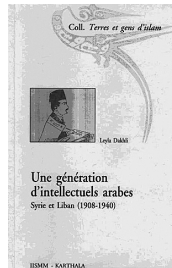
深見 奈緒子

早稲田大学イスラーム地域
研究機構准教授

一七から一八世紀、東インド会社が拠点をおいたアジアの港市において、以下六点を具体的な比較対照点と設定することによって、従来の西欧とアジアの港市という視点からの脱却を試みる。一、港市における東インド会社の立地、二、現地人とヨーロッパの人々のコミュニケーション、三、貿易手続、四、ヨーロッパ商館を巻き込んだ事件の法的決着、五、男女関係、特に異邦人男性と現地人女性その嫡子の問題、六、海外との接触による日常生活の変容である。

収録された論文は、「広東と長崎およびインド洋港市の比較」、「江戸時代長崎における渡日人の法的地位」、「一八世紀広東におけるオランダ東インド会社の商業文化」、「一八世紀日本絵画への西洋および中国の影響」、「景德鎮と伊万里——一七から一八世

紀の中国陶磁と日本陶磁の対話と競合」、「ウォーター・フロント」バタヴィア停泊地を巡る生活と労働」、「一七から一八世紀のアユタヤにおけるシャム法と都市統治へのオランダの介入」、「一六五〇年から一七九〇年のマドラスへの英国人移住とホスト・コミュニティとの文化交流」、「ヒンドゥー宮廷人とフランス統治官——一七四四から六〇年のボンディシェリー」、「スーラトにおける東インド会社の商館と機能——立地、建造物、所有権」の一〇篇で、さまざまな視点から活気ある港市での交流を描きだす。



Leyla Dakhli, *Une génération d'intellectuels arabes: Syrie et Liban (1908-1940)*, Éditions Karthala, 2009.
 『アラブ知識人の一世代——シリアとレバノン』(二九〇八—一九四〇)

岡崎 弘樹

パリ第三大学アラブ研究科

一九〇八年、青年トルコ人革命に影響されながら、リハーニ、ジブラーン、マイ・ジャードといった国際的に活躍する文学者、ターヒル・ジャザイリ師をはじめとする宗教改革者、ファハリ・パールデー

等の欧米に留学した民族主義青年らがベイルート、ダマスカス、パリ等を舞台にネットワークを形成していく。彼らの繋がりは、大学・アカデミーといった教育研究機関の制度化、また二〇年代以降の新聞等の出版文化の開花にも大きく貢献していく。しかし、当初オスマン専制権力の拒否を掲げて団結していたこの世代は、アラブ民族主義者に対する処刑や「アラブの反乱」の挫折(一〇年代)、仏委任統治下での「大シリア革命」の収束および多数の民族主義者の検挙・収監・追放(二〇—三〇年代)を経て、シャハバンダルの暗殺(四〇年)に至る中で、徐々に内部の序列化と分裂を余儀なくされていく。

筆者は「分断線は各党派の支持者の間ではなく、知識人と社会の一般の人々との間にあった」とも分析する。複数の言語を自在に操る新世代のエリート青年らは、自らの足元において「誰に話しかけるべきか」苦悩していた。彼らは、オスマン帝国と西欧列強による二重の支配下で、自らの社会の後進性を克服しアラブ独立国家を勝ち取ることに向けて、生まれながらにして、参加し行動することを切に求められた世代であった。筆者は、当時の時代的、社会的限界に理解を示しながら、彼らが「意味を解読し、翻訳し、政治を指導する者としての力を発揮できた」世代であったと締め括っている。



Hassan Nakata Ko, *The Mission of Islam in the Contemporary World: Aiming for the Liberation of the Earth through Reestablishment of the Caliphate*, Kuala Lumpur: Saba Islamic Media (<http://www.saba.com.my/>), Malaysia, April 2009.

高尾 賢一郎

同志社大学大学院神学研究
科博士後期課程

「カリフ制 Caliphate」は預言者ムハンマドの後継者(カリフ)を全てのムスリムの政治的指導者に擁するイスラーム政体であり、本書はその再興を訴えるものである。導入部と結論部を除いた一七章に渡って著者であるハサン中田孝氏はカリフの地位や役割、過去に見られたカリフ制、またそれが今日再び求められる背景などについて説明し、その主張の筋道は明解である。またカリフが絶対者ではなく、カリフ政体は他宗教の信仰者を含む全人類との共存可能性を備えるといった、カリフ制について誤解されがちと思われる点についても丁寧な解説がなされている。しかし著者の主張の核は、カリフ制再興が全てのムスリムにとっての義務だという点にある。それゆえに本書は今日の誰がカリフにふさわしいのか、

政治的指導者であるカリフを補佐する宗教指導者としてのイスラーム学者は誰なのかといった、「現実的な点」と一般に思われそうな部分に必ずしも言及はしない。その点、一部の読者に隔靴搔痒の感を与える可能性も本書は有していると言える。

本書はまた、今日のムスリムの生活世界の中でカリフ制再興について語る難しさについても触れており、その克服が著者の課題となつてはいる様子もうかがえる。それにあたって著者は、カリフ制再興を主張しやすい国としてインドネシアを挙げており、本書はインドネシア語版も発行されている (*Misi Islamica Di Zaman Modern: Membekaskan Dunia dengan Khilafah*, Jakarta: Pustaka Muallaf, 2009)。同版裏表紙にはイスラーム系団体「ムハンマディーヤ」代表とインドネシア政府スポーツ省大臣が推薦文を寄稿しており、著者がインドネシアに寄せる期待が一方的なものではないことがうかがえる。こうした点——日本で教鞭を執る著者が東南アジアから英語あるいは現地語でカリフ制再興を訴えている現実——は、「地域研究」ととって興味深い考察対象と言えるのではないだろうか。

なお、最後に「現実的な点」に言及すると、現時点で本書の購入は出版社に連絡を取るか、現地の書店で探すことによって可能となる。(http://www.saba.com.my/store/index.php?a=viewProd&productid=269)



丁克家・馬雪峰『世界視野中的回族』
寧夏人民出版社、二〇〇八・九
〔世界の視野の中の回族〕

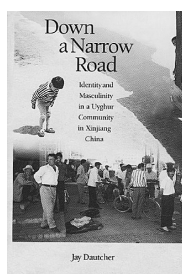
高橋 健太郎

駒澤大学文学部准教授

本書では、主に回族や中国イスラーム関係の英文研究書が解説・批評されている。本書で取り上げられている研究者は掲載順に、M. Broomhall、R. Ismail、J. N. Lipman、D. C. Gladney、M. B. Gillette、M. Dillon、村田幸子、水鏡君 (Shui J.)、M. Jascok、D. D. Leslie、D. G. Atwill、Z. Ben-Dor B.、歴史や社会、思想など広範にわたる。それぞれの研究者に一章が用いられ、研究経歴および代表的な研究書の解説と批評が載せられている。さらに最終章では、二〇世紀における日本での研究動向が概説されている。欧米の研究成果を参照する若手・中堅の中国人研究者が増えているとはいえず、従来、回族関係ではこれほどまとまって英文研究書が解説されたことはなく、研究史を把握するのに有用である。また、本書の出版を契機として、今後、当該分野の中国人研究者との学問的対話が促進されることが期待される。

『世界の視野の中の回族』という書名に

もかわらず、英語以外の文献が十分に取上げられていないことは残念であるが、翻つて、学問的対話の促進のためには、日本語のみならず英語または現地語によって研究成果を公表することの重要性が再確認できる。なお、本書は中国寧夏社会科学院を中心に編集された「中国回族歴史文化叢書」(全七巻)の一冊である。



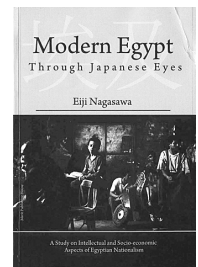
Daatcher, Jay, *Down a Narrow Road: Identity and Masculinity in a Uyghur Community in Xinjiang China*. (Harvard East Asian Monographs 312), Cambridge (Mass.) and London: Harvard University Asia Center, 2009.

菅原 純

青山学院大学非常勤講師

本書は中国・新疆ウイグル自治区イリ地方(とりわけグルジャこと伊寧市)に居住するウイグル人とその社会に注目し、アプローチを試みた文化人類学の著作である。具体的にはその生活空間、ローカル・アイデンティティ、ジェンダー、ライフサイクル、経済活動そして宗教行為の社会的側面等のトピックにつき、コミュニティのなかでの人々のアイデンティティと男性たちの社

会的結合形態（著者はこれに「男性性 masculinity」という用語を当てている）に特に注目し、詳細な記述と分析とが試みられている。新疆において、外国人研究者が長期にわたりフィールドワークをおこなうことは、新疆特有の事情により、依然として実施が難しい状況にある。そういった中であって、著者は例外的に一九九〇年代半ばに一年余の期間、実際にイリのウイグル人ホスト・ファミリーのなかに身を置くことを許され、参与観察の手法により社会調査を実施したものである。それゆえ本書に示された著者の観察はそれ自体疑いない希少性を有しており、著者はそこに広範に渉猟された資料文献の記事情報や直近の人類学の研究成果などを周到に織り込むことで、本書の記事に比類の無い高い参照価値を持たせることに成功しているのである。また本書は生硬な学術論文の文体をとらず、終始一人称で自分の体験を追体験させるような語り口で、家庭や地域コミュニティ、そして市場と言った複数のレヴェルや場面で、眼前に生起する事物や出来事をつぶさに提示するスタイルを取っている。学術上の議論を離れた「異文化体験の書」としても十分に読み応えある一冊であると言えよう。



Nagasawa, Eiji, *Modern Egypt Through Japanese Eyes: A Study on Intellectual and Socio-economic Aspects of Egyptian Nationalism*, Merit Publishing House, Cairo, 2009.

鈴木 恵美

早稲田大学イスラーム地域
研究機構准教授

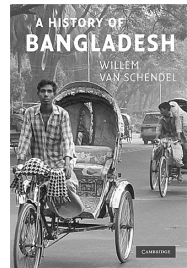
本書は、筆者の過去三〇年に亘る研究の成果を、日本人研究者から見たエジプトの知識人というテーマで編んだものである。本書は三部で構成されている。第一部では、エジプト人知識人によるナショナルアイデンティティーの模索に焦点を当てている。そこでは、社会学者サイイド・オワイス、ユダヤ系エジプト人マルクス主義者アフマド・サーデイク・サイードの生涯、エジプト人児童の目から見た一九一九年革命など、各方面からエジプトのアイデンティティーに対し考察を加えている。

第二部は経済変化と社会運動についての論文がまとめられている。そこで扱われているのは、エタティズムと国家ブルジョワジー、エジプトにおける経済改革の歴史的意味、開放経済後の都市暴動と社会運動、

日本とエジプトの急進的な社会運動の比較などである。

第三部は日本における中東研究の再考である。先駆的中東研究者として中岡三益と板垣雄三を事例に、第二次大戦後の日本のアラブ研究の歩みがまとめられている。そして、日本の中東研究機関として筆者も身を置いたアジア経済研究所とその著作が分野ごとに紹介されている。巻末には板垣雄三、加藤博両名の著作に対する筆者の考察も収録されている。英語で書かれたこの著作は、日本の中東研究の今を世界に伝える役割を果たしてくれるだろう。

書評



Willem van Schendel, *A History of Bangladesh*. Cambridge: Cambridge University Press. 2009.

フマユン・コビル

Humayun Kabir

早稲田大学イスラーム地域
研究機構客員研究員

紀元前一五〇〇年以上前から現代に至るまでのベンガルデルタの地理的・環境的形態の特徴を扱うことによって、長い歴史の中での南アジアの国民国家としてのバングラデシの出現が描かれる。本書は、選り抜かれてはいるが総合的なバングラデシの姿を与えるべく、また今日のバングラデシ社会が、どのようにして現在の姿となったのかを理解するべく、社会、文化、政治的特徴の変容を活写している。ベンガルデルタは西洋の人々やアラビア系移民を含む多くの来訪者を引きつけていた。彼らはその土地に入り込み、結果としてベンガルの人々の社会的・文化的な境界に影響を与えることとなった。

シェンデルは、「バングラデシの歴史はフロンティアの歴史である」と明確に主

張している。(二四頁) 農地、国家、宗教、そして言語のフロンティア(境界)は対立、交戦を伴って接触し、相互に順応していったのである。このような異なるフロンティアの相互作用の結果は、バングラデシ社会の「重層的な構造」における「複合的なアイデンティティ」を作り出した(二三頁)。例えば宗教的なフロンティアにおいては、イスラームは東ベンガルにおいて一次第に支配的な宗教になりつつある。とはいえ、イスラーム文化に加え、仏教、ヒンドゥーがベンガル人の宗教文化を形成している。シェンデルは歴史学者リチャード・M・イートン(一九九四)の論を発展させた。イートンは、ベンガルの国家フロンティアと農耕フロンティアが特に東ベンガルにおいて、どのように密接な関係を持っていたかを提示したが、それは非都市民のイスラームへの大量改宗の媒介となっていたのだ。シェンデルが言うように、たとえ「東部バングラデシのイスラーム・アイデンティティが、バングラデシ西部のそれよりも厳格化する傾向にある」としても、イスラームは現地の慣習と信条に協調的であり、それゆえに、本質的に、アシム・ロイ(一九八三)などのベンガル史研究者が明らかにしたような「混濁的」形態になりえている。

イスラームの厳格さと混濁的な伝統は、互いに衝突し、絡み合い、植民地化とその葛藤によって悪化した。それは文化人類学者のギアーツ(一九六八)が我々に示しているように、インドネシアにおける背景と似ており、植民地主義への反応は、諸島の人々の間において、厳格なイスラーム・アイデンティティ―それは、国内における伝統的、もしくは混濁的なイスラームの伝統に取って代わろうと試みるものであるが―を作り出す傾向にあった。

シェンデルが分かりやすくまとめた歴史的背景は、地域主義に基づく明確なベンガル人のアイデンティティがどのように「ムスリムであるベンガル人」もしくは「ベンガル人のムスリム」のアイデンティティを形作るのかを読者に示している。しかしながら、多くの人々は少数の部族や民族のようなアイデンティティには属していない。ベンガルにおける植民地主義の存在は、そこに属する人々に衝撃を与え、地域・国家への帰属という意識を生み出し、それは一九世紀の多数の社会運動家や、イスラーム復興主義者の活動によって促進されたのであった。

バングラデシが一九七一年にパキスタンと分離し、経済的搾取と政治的・文化的抑圧を否定することで、新生の国民国家として出現したとき、人々の国家建設に対する意識は、地域主義に基づいた明確なアイデンティティとともに形作られていた。しかし、シェンデルが以下に位置づけるように、国家が歴史的に継承されるものであるのかという文化論争は、いまだに社会の中で解決を見ていない。つまり、「バングラデシ社会において今後イスラーム化が進むのかあるいは世俗化が進むのかについては、まだまったく結論が出ていない。デル

タにおける最も若い世代が、「ベンガールムスリム」というハイフンで結ばれた旧態のアイデンティティに、どのような新しいうねりを与えることになるのかは、いまだに議論のさなかにある（二六三頁）。

参考文献

Eaton, Richard M. 1994. *The Rise of Islam and the Bengal Frontier, 1204-1760*. Delhi: Oxford

University Press.
Geertz, Clifford. 1968. *Islam Observed: Religious Development in Morocco and Indonesia*. Chicago: The University of Chicago Press.
Roy, Asim. 1983. *The Islamic Syncretistic Tradition in Bengal*. Dhaka: Academic Publishers.

「イスラームを知る」シリーズ 山川出版社

イスラーム教徒の考え方や行動の様式は、日本人の場合とはかなり異なっている。そこにイスラーム理解の難しさもあるし、同時にイスラームを知る意義もあるといえよう。現代の私たちは、グローバル化したイスラームの宗教や文明に向き合い、これをさらに深く理解する必要に迫られている。

「イスラームを知る」シリーズは、全国的な共同研究「NIHU（人間文化研究機構）プログラム・イスラーム地域研究」の成果であり、異文化理解へ向けて信頼ある案内役を果たしてくれるものと信じている。

○佐藤次高
『イスラーム——知の営み』

谷口淳一
『聖なる学問、俗なる人生——中世のイスラーム学者』

仁子寿晴
『文明の邂逅——イスラーム世界の東と西』

○森本一夫
『聖なる家族——ムハンマド一族』

濱本真実
『共生のイスラーム——ロシアの正教徒とムスリム』

菅瀬晶子
『新月の夜も十字架は輝く——中東のキリスト教徒』

松本ますみ
『イスラームへの回帰——中国のムスリマたち』

山根 聡
『4億の少数派——南アジアのイスラーム』

川島 緑
『マイノリティと国民国家——フィリピンのムスリム』

○横田貴之
『原理主義の潮流——ムスリム同胞団』

私市正年
『原理主義の終焉か——ポスト・イスラーム主義論』

○小杉泰・長岡慎介
『イスラーム銀行——金融と国際経済』

○は既刊